

心理検査と認知神経科学

林 洋一
北陸大学

人類の誕生をいつ頃にするかについては、人類の定義の仕方によって異なる。現生人類である *Homo sapiens* は約 30 万年前にアフリカで誕生したと考えられており、それが約 5 万年から 6 万年前にアフリカを出て、世界に生息域を広げていったと言われている。そのころの人類がどのように自己や他者を認識していたかを正確に知ることはできないが、新石器時代を経て文明が始まったのは約 1 万年前。この時期になると定住と農耕が始まっているが、記録手段としての文字が発明されたのは約 5 千年前。そしてその頃から、社会制度や階級、宗教儀式、そして神話などが作られるようになっていったと考えられている。

現代の日本社会は、狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会の次に位置する *Society 5.0*（サイバー空間と現実空間の融合による、人間中心の超スマート社会）に入りつつあると言われている。この間に脳科学、認知神経科学は大きく進歩しており、かつて行動主義・新行動主義の心理学で主張された「脳はブラックボックス」という状態ではなくなっている。

しかしながら、ある人が何を意識したか考えているか、そしてどのような感情を持っているかについてその内容を外部から正確に知ることは、現時点では不可能である。非言語的なコミュニケーションによりその情報がある程度推測することは可能であるが、多くの場合は本人からの言語的な情報を得るしかないであろう。

このような状況下では、認知神経科学においても心理検査が大きな意味を持つ。心理検査の起源についてはいろいろな説があるが、個人差の測定を客観的行おうとした James McKeen Cattell (1890)、そして知能検査を開発した Alfred Binet と Théodore Simon (1905) らの研究が重要である。とくにビネー・シモン式知能検査とそれを改良したスタンフォード・ビネー検査、後者を日本に紹介・標準化した田中ビネー検査は、その改訂版が現在でも使われている。

現在では、知能・パーソナリティ・適性・社会適応・発達・発達障害・ストレスなどの多様な領域で、様々な心理検査が開発・使用されている。認知神経科学の領域についてみると、脳機能と行動との関係、脳画像データと心理機能の関係、統合失調症やうつ病などの精神疾患のプロフィール作成、認知症・軽度認知障害のスクリーニングや認知機能の把握など、医療や教育現場においても幅広く使われている。

本講演では、認知神経科学における心理検査の利用と実施上の注意点、さらにはその限界を含めて紹介したい。